【論文】

教育博物館における教育機能の拡張 一手島精一と棚橋源太郎による西洋教育情報の受容—

Development of Educational Function concerning
Educational Museum in Japan
—Acceptance of Western Information
by Seiichi Tejima and Gentaro Tanahashi—

佐藤優香* Yuuka SATO

1. はじめに

19世紀は科学と技術の進歩の時代で、さまざまな「物」を開発し、その「情報」を普及させていくために、西洋各地で万国博覧会がひらかれはじめた。そのような中、西洋諸国や日本では、教育の近代化と普及に関心がよせられていて、万国博覧会にも教育にかかわる物や情報が集められ展示された。そうした時代にカナダのトロントを皮切りに世界各地で数多くの教育博物館が設立された。日本もいちはやくそのような企画を採り入れ、1877 (明治10) 年には文部省系の最初の博物館として教育博物館が開館した。

教育博物館についての先行研究としては、椎名仙卓氏による、日本における科学博物館の発展を跡づけた『日本博物館発達史』¹、石附実氏による、教育に関する西洋の近代的な「モノ」の受容と日本における子どもの生活とを関連づけた『教育博物館と明治の子ども』²などがある。

本論文では、教育博物館をとりあげ、開館から10年にわたりその経営の中心にあった手島精一と、高等師範学校の附属となり低迷していた教育博物館を教具の研究機関として再建し、さらに自然科学の博物館としての独立に導いた棚橋源太郎の2人に注目

し、西洋情報をいかに受容していったか、博物館の 機能をどのように発展させていったか、ということ を明らかにしたい。

2. 手島精一による西洋情報の受容と教育博物館の 経営

1) 手島精一の洋行と教育博物館の構想

手島精一は1849 (嘉永2) 年沼津藩士の田辺四友の二男として生まれ、12歳の時同藩士手島右源太の養子となった。藩学明親館の洋学局で学び、1870 (明治3) 年藩に借金をしアメリカ留学に出発した。アメリカでは、フィラデルフィア小学校、ラフェット大学で学ぶが、出発時に希望していた理工学に関する学問を修めることなく、岩倉使節団の通訳として米国視察に参加ののち英国にわたり1874 (明治7)年12月に帰国した。東京開成学校監事を経て1876 (明治9)年4月文部省八等出仕となりフィラデルフィア万国博覧会のため米国にわたり、1877 (明治10)1月に帰国した。この米国出張が、手島と教育博物館の関わりのきっかけとなる。

手島は、当時文部大輔であった田中不二麿の通訳 としてフィラデルフィア万博の教育展示やカナダト ロントの教育博物館を視察した。その時のことを後

*甲南女子大学大学院文学研究科教育学専攻博士後期課程

平成10年1月19日 受理

になって「亜米利加に赴きまして、わが文部省の教育に関する陳列品の整頓、その他のことに従事すると共に、文部大輔の通訳を為しつゝ、始終随行もしましたし、又、それと共に、彼の地の学校を参観するとか、又は、報告を書くとかいふやうな訳で、翌年まで忙しく暮しました」。と語っている。この出張の報告書である『米国百年期博覧会教育報告書』も、田中に代わって手島が書いたのである。

手島は、帰国の翌月、文部省一等属教育博物館御 用掛となり、以後、館長補、館長を務めることとなっ た。教育博物館のことをふりかえって、手島は次の ように語っている。

「文部省の意向も、教育博物館と云ふものを以て教育上の指導」をしようとしており「どうしても一国の発展は、科学がもつと進歩しなければならぬといふ私の考であるから、私は科学に聊か力を入れて見ました。そこで、物理や機械の講義を学校でやる様に仕て見やうと思つて、幸い博物館には外国から持ち帰つた機械がありましたから親しい人とか、又、日本内地の機械の製造者その時分は未だ一向に少かつた所の物理機械の製造者などを集めて、物理学や機械学の講義も致しましたし、又、我国品に模して機械を製造して見たらよからふといふようなことで、啻に物品を陳列したばかりでなく、傍らそんな事をやつて、さうして工業教育の一日も早くわが国に行はれることを期待しつ、あつたのです」

手島は四半世紀にわたり東京高等工業学校に勤め、工業教育とくに実際の現場で役に立つ教育をすすめてきた。その教育活動のはじまりが、こうした文部省役人としての教育博物館の経営にあった。そしてそれは、そのはじまりから工業教育を意識したものであったことが、手島の回想からわかる。

手島は自身が学問を志したときから、西洋の理工に関心をいだいており、いくだびもの洋行をかさねて西洋情報を学びとり工業教育の実現に生かしていく。フィラデルフィア万博の際の渡米により、教育博物館の開館から初期の運営に力を尽くしたが、その次の洋行である1878 (明治11) 年のパリ万博への渡欧の際も教育博物館の充実に尽力している。というのは、この時手島は教育品を購入するために英国へ出張した。その出発に際して、文部卿であった九鬼隆一は、手島に書簡を送っており、それによると

九鬼は「物事ヲ採集編列スルハ則チーノ工風ニシテー学衆ヲ利スルノ具ナリ然レハ皆之レ先進ノ遺物ニ就テ之カ適否ヲ我地ニ可裁シ以テ衆民ニ教示シー国ヲ富利スルノ原力トナス教育博物館ノ設置ハ荷クモ此理ニ外ナラサルヘシ」。と、国を富ますため、大衆を教育するため、教育博物館は重要であると説いている。『文部卿代九鬼文部少輔口述扣』。においても九鬼が、ものを並べて見せるという教育の方法に注目し、その実現を考えていたことがうかがえる。

こうした九鬼からの手紙に対して、手島は「教育博物館ハ之ニ異ナリ各種ノ学術ニ入ル基礎ヲ立ツルノ物品即チ父母ノ家庭ニ用フル教育品幼稚及ヒ小中学用教育品及ビ教育家参考物品等ヲ排列スル所ニシテ其物品ハ高尚ナラスト雖モ其関渉スル所ハ極メテ大且博クシテ一般人民ニ利益アランカ為メ設立セシモノナリ……教育博物館ニ蒐集セントスルノ物品ハ其目的二様アリーハ公衆ノ来観ニ供シーハ模造ノ参考ニ備ヘントスル」と、2つの収集目的を示し返信した。

2) 手島精一の教育博物館経営

パリ万博の参加や英国での教育品購求のための出張から帰国した手島は、文部省に教育博物館の事業計画に関する報告書。を提出した。それは10ヵ条からなり、1)物品解説目録の編成、2)和漢洋書籍目録の編成、3)椅子・卓子の製造、4)実物教授用具の製作、5)実物教授用掛図・理化学博物学用掛図の製作、6)理化学器械の製造、7)金石・植物・動物標本の製作、8)内国博覧会への該館物品の出品、9)該館吏員の地方学校の巡回、10)教育博物館委員の編成と重要事項の審議である。これらは、その後手島によって実行され、5、9、10以外は具体化し効果をあげた。9

こうして、手島が教育博物館で活躍したことは、高く評価されている。手島が教育博物館を去った後に出版された『教育界』臨時増刊号『東京教育博物館』10にも、手島を讃える記事が多くみられる。例えば、「上野公園の教育博物館は、流石手島精一君の経営に出来ただけあつて、同君が主宰せられた間と云ふものは、随分活動もして教育社会に利益を与えることが多かつた」11、「手島精一君が熱心に此の教育博物館を整頓して居られた」12、「如何なる人々が最

も本館の為めに尽力せられたのであったかといふと、何人も先づ第一に手島精一氏を推さずに居られまい。氏は度々外国の博覧会に出掛けられた序を以て、或は新奇の外国教育品を購求したり、或は本邦品と交換を試みたり抔して、種々の外国教育品を持ち帰って、之れを本館に陳列せられたのである。今日本館に外国教育品の多いのは、実に氏の賜物であるといはねばならぬ。聞けば氏は当時この教育博物館を第二の我家であると曰はれて居たとのことである。其の熱心の程も推し測れるではないか」13と。

手島が中心になって経営していた教育博物館の事 業をふりかえると、まずあげられるのが、新教具の 普及である。『文部省年報』には「本邦ニ於テ従来教 育所用ノ諸器具類ニ乏シク諸学校等ノ不便少ナカラ サルヲ以テ当館ニ於テ漸次之ヲ撰択シ製作人ヲ奨励 シテ調整セシメタルモノ少カラス其物品ハ載セテ当 館撰教育品目録ニ詳ナリ」14とか、「文部省ヨリ地方 学事奨励ノ為メ要スル教育用器具ノ購入ヲ当館ニ嘱 シ多数ノ物品ヲ調整セシメタルヲ以テ製作人ノ業大 ニ進歩セリ」15とあり、教育博物館は、新教具を選定 して、その製作を奨励していた。また、「理化学器械 ハ其ノ紹介ヲ望ムモノ陸続相接シ特ニ之カ為メニ書 信ヲ往復セシ件三百有余ノ多キニ至レリ 16、「理化 学器械ノ紹介ヲ望ムモノハ逐年増加シ」17とあるよ うに、博物学標本・理化学器械の紹介もさかんに行っ ていた。

教育博物館経費の中には、各府県で開催される博覧会出品の補助金もふくまれており、文部省の第七、八、九、十二年報に「各所博覧会出品ノ件」が載せられている。そのことは、全国各地の学校で使用する教育品の進歩と普及に寄与した。1880 (明治13)年から1886 (明治19)年の間には、『文部省年報』に教育博物館のことが独立してくわしく報告されており、その間、博物学の標本や理化学器械紹介に関する報告が毎年掲載され、その需要は大きかった。教育博物館は、地方学事奨励のための理化学器械や標本提供の役割をになう、近代教育の「ショウ・ルーム」118 だったのである。

次に、新教育の啓蒙活動である。雑誌『教育時論』 において「東京教育博物館の美事として、永く記す べきもの二あり、其の一は内外教育書類を蒐集して、 教育書籍館を開きたりしことにして、其の二は学術 講談会を設けたりしことなり。今や教員講習会と云ひ、夏期講習会と云ふもの、都鄙に行はる、而かも之れが嚆矢たりし者は、東京教育博物館が、夙に明治十七年の冬、始めて開筵したる学術講義会にあらずして何ぞ」¹⁹とたたえられた学術講義は、手島の考案ではじめられた。この講義は、動物学など理科に関するもので、東京近郊の小中学校教員に対して行われた。²⁰

最後に、海外との交流活動である。雑誌『教育界』 に「本館の陳列品について特に注目すべきは、海外 諸国の教育品の多いといふことである……手島精一 氏が度々外国の万国博覧会に出張せられた序に、持 帰られたものが多分を占めて居るのである。氏は既 に明治九頃亜米利加の博覧会に行き、同十七年に英 国倫敦府万国衛生博覧会に行き、同二十三年に英国 にて開催の万国博覧会に行き、而して、其の都度、 本館の為めに新奇の外国教育品を持帰へられたので ある」21 と記されたように、教育博物館の特徴のひと つとして外国製の教育品を多く所蔵していたことが あげられる。「他ノ博物館ト謀リ互ニ有無ヲ交換スル ヲ好シトス」22と、フィラデルフィア万国博覧会の報 告書に記した手島は、「遂に費府博覧会に出陳せる彼 我の物品を交互に交換するを約したりき |23 とトロ ントの教育博物館とものの交換の約束をし、その誕 生以前から海外との交流によってものを集めてい た。『文部省年報』にも「排列スヘキ物品ハ金額ノ許 多ナルヲ顧ミス人力ノ許多ナルヲ厭ハス一時ニ之ヲ 蒐集センカ曰ク然ラス夫レ世界ノ濶キ各国ノ多キ博 ク教育学術ニ関スルノ物品ヲ蒐集セン」24とあり、諸 外国の博物館と物品を交換外国製のものを集めるこ とを勧めていた。

具体的には、アメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オーストラリアなどと交流していたことが『文部省年報』に報告されている。25 日本の海外との交流は、他国からも注目されていたようで、P. モンローの編集した A Cyclopedia of Educationに「新しく改善された教授用具を強調するとともに、少なくとも5分の1の博物館は、教育の進歩には非常に重要な、思想の国際交流に注目し、外国の展示物を自らの展示物に含めることを計画している。この教育思想における国際運動のいくつかの顕著な例は、トロント、東京、南アメリカの博物館である」26 と、

紹介された。また、多くの外国人が教育博物館を訪れた。

3)教育博物館の縮小と手島精一の新博物館構想 1886 (明治19)年3月、教育博物館の事務は縮小され、総務局の所属となり、館長制が廃止された。 1888 (明治21)年1月には、文部大臣森有礼から、「普通教育ニ属スルモノノ外ハ追テ省除スへキ目的ヲ以テ斬次淘汰スヘク」²7との訓令が出され、収集・展示するものは、幼児教育、普通教育、学校建物、生徒の学業成績に関するもののみと定められた。この訓令がでて1年後に、森は暗殺されるが、その後も教育博物館の縮小政策は続けられ、1889 (明治22)年3月には、土地建物を東京美術学校へ引き渡して移転し、6月には一旦閉館し、7月には高等師範学校の附属となった。

教育博物館に対するこうした政策に手島精一は反対し、博物館は「一大実物示教場ニシテ一般公衆ヲ益シ為メニ汎ク学術技芸ヲ促進スヘキノ便多キハ学校ノ比にアラス」²⁸、「他省ニ属スレハ自ラ境界アリテ互ニ不便ヲ感」²⁹ じるし「教育上所用ノ物品ヲ購求セント欲スル者ニ之ヲ紹介シ又博物標本ヲ撰調シテ需望者ニ払下ケ且ツ大学等ノ学士ニ嘱シ教員ノ為メニ学術講義ヲ開設スル等ノ事ヲ為」³⁰ すためにも文部省の所管とすべきで「世人ニ及ホスノ利益ハ決シテ此僅々タル費用ノ比ニ非ス」³¹ と、文部省の一機関として、教育博物館を存続させる意義を説いた建白書を提出した。

手島はさらに、「帝室博物館ト教育博物館トヲ合併 シテ帝国博物館ヲ建設スルノ建議案」や、「奉請博物 館合併表」を提出した。

前者においては、宮内省の所轄にあった帝国博物館について「文部省ノ他ニ之ヲ管理スベシモノナシ文部省ハ教育学問ヲ管理スル所ニシテ博物館ノ列品中之ニ関セザルモノ少ク或ハ興業殖産ニ関スル品具ナキニアラザルモ亦其源ヲ学術技芸ニ発セザルモノナキヲ以テ視ルトキハ本館ハ勿論文部省ノ所管ニ帰セザルヲ得ズ……帝国博物館中ニハ教育部、農工商部、美術部、図書部等ヲ置キ……教育部ハ教育博物館ノ列品ニ宮内省博物館ノ之ニ該当スル物品専売特許品商品見本等ヲモ陳列シ武術部ハ宮内省博物館中其物品

ニ乏カラズ図書部ハ東京図書館ヲ以テ之ニ充テ宮内 省博物館ニ有スル図書ヲ合併シ又内閣記録局ニ有ス ル図書モ其多数ナルニ似ズ併用少キヲ以テ該局ニ於 テ所要少キ分ハ之ヲ図書部ニ移セバ大ニ蔵書ノ数ヲ 増シ求覧者ヲ裨益スルコト少カラザルベシ」32と述 べた。

後者においては「農商務省ノ博物館ニ於テ動植物 及ビ金石或ハ軍器等ヲ排列スルカ如キハ是レ則チ東 京教育博物館及ヒ遊就館ノ陳列品ト全ク重複ス夫レ 重複ノ事タル同事同物ヲ以テ之ヲ各所ニ蒐集調査ス ルカ故ニ今之ヲ一所ニ於テスルモノニ比スレバ則チ 其徒費徒労ハ固ヨリ多ク亦研究上ニ於ケルモ其詳悉 ヲ得ルニ至ラサルハ乃チ勢ノ然ラシムノニシテ又多 言ヲ俟サルナリ」³³と述べ、文部省が博物館施設を所 有するために国が管理している博物館を全て合併し て経営の効率化をはかることを提案した。

3. 棚橋源太郎による西洋情報の受容と教育博物館 の経営

1) 棚橋源太郎と理科教育

高等師範学校の附属となった教育博物館の6代目の主事であった棚橋源太郎は、1869 (明治2) 年岐阜県の農家に生まれた。化成舎、北方小学校で学び、母校の授業生を経て1889 (明治12) 年岐阜県尋常師範学校を卒業し、同校附属小学校訓導となった。1892 (明治25) 年には高等師範学校に入学し、1895 (明治28) 年その博物科を卒業、兵庫と岐阜の師範学校の教諭兼訓導を経験し、1899 (明治32) 年より高等師範学校に勤めることとなる。はじめ訓導として附属小学校に勤務した棚橋だが、1903 (明治36) 年には東京高等師範学校教授となった。当時のことをふりかえり「私は理科出身だからオブジェクト・レッスン (実物教授法)」をもって、観察科や郷土科や理科を教え「講習会に引っぱりだこや、教科書を書かされたりしたんですよ」34 と語っている。

教科書以外にも、棚橋は雑誌論説を多く残しており、高等師範学校在学中から行っていた理科教材紹介の連載では、毎回身近な動植物をとりあげ丁寧な図解をつけ、実物を手にして学ぶことを大いにすすめていた。35 実際、兵庫や岐阜で教壇にたっていたときも野外学習をとりいれたり、試験で本物のキンポウゲを1本ずつ配って花の構造について答えさせた

り36と、書物だけにたよらずに学ぶことを重視して いた。東京高等師範学校附属小学校でも、棚橋が主 査となって調査し、校外観察を生徒に課すことの価 値を説いていた。それによると校外観察とは「一定 の計画を以て、児童を学校の附近なる公園、社寺、博 物館、動物園、製作所、草野、田畑、森林、池沼、湖河、 海浜、丘陵等に引率して、其の実際を観察せしめ、 主として実科的知識の収得に資し、兼ねて教育全体 の上に裨益する所あらしめんとするに在り」37とい うものである。このなかには、博物館の利用も含ま れており、「殊に博物館を有する都市に在りては…… 必ず之に依らざる可からず。之れ歴史教授に校外観 察の欠く可かざる所以なり | 38 と歴史の教授にも有 効であるとしている。附属小学校での校外観察の予 定をみると、第二部高等科の各学年で年間2~4回 の博物館訪問が計画されていた。

棚橋は、教育博物館の主事となるまで博物館と直接関わりはなかったが、このように雑誌上にとりあげたり『ヒュース嬢教授法講義』39の中で学校博物館の有効性を紹介したりしており、このころには博物館の持つ教育機能に注目しはじめていたのではないかと思われる。しかし、棚橋自身の言葉で、博物館を主題に語るようになるのは、主事になってからのことである。

2) 高等師範学校の附属となってからの教育博物館 高等師範学校の附属となってから、教育博物館は どのような道をたどったのだろうか。『文部省年報』 によると、1895 (明治28) 年には「本館陳列品ノ増 加及陳列ノ方法ニ就キテハ前年来計画スル所アリシ カ本年開館時限ヲ改正シ新ニ出品者心得ヲ定メ陳列 ノ方法ヲ整理スル等之カ改良ニ着手 |40、1898 (明治 31) 年には「本年大ニ従来ノ陳列方法ヲ改メ」41、1899 (明治32)年には「本年ニ於テ物品ノ区分配置ノ方法 ヲ改メ来館者ヲシテ漏ナク閲覧セシムルコトニ勉 メ」42と、改善を試み、特に資料の展示方法に注意を そそいでいたことがうかがえる。しかし、先にもあ げた『教育界』の臨時増刊号をみると、当時、教育 博物館の評判は必ずしもよくない。「今の裁縫及び手 芸の陳列品は、もはや長く陳列してありますから、 殊更に取り出して見る必要を感じないのでありませ うこと思ひます。それでは折角陳列してある甲斐が ないのでありますから、ずんずん新らしい参考になるものを求めていたゞきたいと思ひます」43、「彼の教育博物館に陳列しある学校建築の器具、模型、標本等の如きは、概ね皆な旧式にして、現在の用には供し難いものである」44と、せっかく展示方法を検討していても、資料そのものが古く「まるで、今日の所では唯々古道具屋に往つやうな体裁であつて、実に情ない有様」45だったのである。そして「今や我国の教育博物館と称するものは、高等師範学校の附属に一つあるけれども、これは殆んど活動していない教育博物館である」46とまで言われていた。

当時、東京高等師範学校長であった嘉納治五郎は、 同誌上に「東京教育博物館に就て」47という一文を掲 載しているが「自分が此職に就いてから以来、四人 異つた主事に其の仕事を託して見た。何れも皆な相 応に成績は宜かつたが、特に満足する程には至らぬ」 と、教育博物館の運営責任者も現状に満足していた わけではなかった。嘉納校長は、さらに続けて「何 れも皆な繁劇なる職務を有つて居る人に其の余暇を 以て教育博物館の任務に当らしめたのである。又夫 頃の人は初めより教育博物館のことを特に研究した 人では無いのである」と、人材不足をなげいた。そ れにあわせて教育博物館は、経費不足という問題も かかえており、「高等師範学校附属となつて10年以上 も経つた明治36年度においても……備品費はわずか 766円」で「今一方には何とかして適当なる人を得た いものと考へて居るが、若し急に其の人が得られな ければセメては人を育て又考案を集め、機械、器具、 標本、書籍等を蒐集する経費を得られる様にしたい と嘉納校長も考えていたのであった。

そのような中でも「検定試験でも受ける時節になると、金石の標本を見せて呉れとか、何々の本を見せて呉れとか云つて来るものが多かった」⁴⁸ し、児童向け雑誌『少年世界』では、教育博物館の案内が図入りで6ページにわたり掲載されてもいた。⁴⁹

このような教育博物館は、子どもの目にはどのように写っていたのだろうか。10歳の児童が書いた「教育博物館を観るの記」50 によると「あらゆる学校用の器具から、実験上必要な機械見本などが目まだるい程列べてあつて、列べ方も整つて居る」とか「これから実物を見なければ解らない事があったら、直に此處へ駈附けやうと思つた程」とか「学校の生徒で、

未だ此教育博物館を見ない人は、早く行つて御覧なさい」と、魅力ある施設であると感じていたようである。しかし、この児童が「実際動して見なければ、何の効用があるのか、僕には解らないものも沢山あつて、たゞ玻璃越しに見て仕舞ふのは、如何にも惜いものだと、僕は思つた」とか「只見たばかりでは何つするものか解らないものが沢山にある」というように、物が置いてあるだけで説明や実験のない展示方法をしきりに残念がっていたことも注目すべきであろう。

このとき棚橋は、まだ教育博物館の経営には関わっていなかった。先の『教育界』の臨時増刊号には、高等師範学校の教諭兼訓導として「実物教授品」⁵¹ と「動植物礦物及び生理教授用品」⁵² の 2 つの論説をよせている。

「実物教授品」では「本館陳列の庶物標品は、大概外国出来のものばかりで、我邦のものとてしては僅に二三点に過ぎない。何れも二十年前のもので余り参考になる様なものもない。最も、外国出来のものも、近年に到来したものは殆んど皆無で、二三点を除く外は感心の出来ぬものが多い」53と辛口の評価を下しており、「動植物礦物及び生理教授用品」においても「これという新奇な点も、格別認められ無いから、一々紹介する程のこともあるまい」54とことわってから、いくつか参考になるものを紹介している。興味深いのは、この論説の最後に記されている「総評と本館に対する希望」である。

「今度本館を通覧した上で、われの第一に感じたのは、一般に世間の学問や芸術上の知識趣味の普及発達を目的として居る、彼の普通の博物館に対して、特に学校の教授法や家庭の教育法や学校全般の経営などの、発達進歩を促すことだけを目的として居る本館の特色を、今少し発揮させたく思つたことである。本館には日々百人以上の来館者があるとのことであるが、其の来館者の種類は果して教育博物館が要求する所のそれであらうか。われは、今回の調査のために本館を見舞うこと数回、幾多の来館者を見たのである。併しながら、小児・子守・素町人・試験の準備のため標本を借覧する学生・雑誌書籍を縦覧し楽器を借り受けて練習する学生は、実に其の重なるものであつて、純粋の教育関係者らしき人は、之を見受けることが少くなかつたのである。教育博

物館が、此の如く吾々が従事して居る附属小学校のやうに、日々数十人の熱心な真面目な地方の教育家諸君を送迎することを得ないのは、抑も何うした訳であらうか。本館のためわれの最も遺憾とする所である。こは、もとより此の博物館でふものが、まだ十分に世間に紹介せられて居らぬことが、其の重ない。併しながら、本館にも亦、日々多数の教育家を引きつけて、来館されて、其の教育博物館たる価値を十分に発揮するだけの資格が既に具へられてあるであらうか、吾々さい此の如き疑問を起こすのであるから、本館の対策監や、購入費の不足を訴へて居られるのは、誠に無理の無いことである。われは、本館に対して、積極的の希望を持つて居るのである」55

このように棚橋は、教育博物館が世間に紹介され、教育関係者のためにその機能が発揮されることを望んでいた。そして「在京の教育家諸君は勿論、地方から同時態々教育事務や学校事業の取調のため上京せらる、如くに、今後は、必ず本館をも見舞ふことをお忘れなく、適当に之を利用して、益々本館の特質を発揮されんことを望まざるを得ない。何ぜなれば、本館の価値を発揮するには、独り本館の当事者ばかりに頼ることは出来ない。来館者と相待たなければならぬからである」。66と教育博物館の発展は、その経営側だけでなく、教育関係者の利用によってさらに広がっていくと考えていた。

このとき、棚橋が「消極的希望」とことわって提案した、教育博物館に対する考えは、1)陳列品の選択や排列に高等師範学校内の初等中等教育の実際に携わっている専門家を任命する、2)陳列品を淘汰して玉石混淆をさける、3)歴史的順序に排列して展示し新しいものと古いものの混淆をさける、4)博物標品について学校用の模範標本を用意する、の4点である。57

3)教育博物館主事棚橋源太郎による特別室の開設 1906 (明治39)年に棚橋源太郎が教育博物館の主 事となった。この年の第一回全国小学校教員会で、 棚橋は、教育博物館についての演説を行なったが、 それによると「人によりては、教育博物館の任務を 広義に解して、独り教育者のみに限らずに、世間一 般の人の智識を普及するために経営すべきものとし

て居るのであります……教育博物館は、特に教育の 改善のために、教育者の智識を進めることを唯一の 目的とすべきものと信じます」とか「教育関係の吏 員、学校長、教員等はいふに及ばず、師範学校の生 徒などに対しては……非常なる便利を与へることが 出来る」とか「海外の或る教育博物館では身近な学 術上の事項に関し、通俗講義を催ほして、学問の普 及に努めて居るものもあるが、私の考では、斯うい ふ類の仕事は、教育博物館の本領とする所ではない」 と、利用対象者を教育関係者にしぼっている。この 時点では、社会教育的役割は視野に入れておらず、 教育博物館の任務とは、第1に「最新の教授用具、 家庭、学校に於ける教育上の諸設備を、世間に向つ て紹介し推挙する」、第2に「内外国教育の過去、現 在の情況を容易に知らしむること」、第3に「教育の 理論、実際に関する智識を普及すること」としてい た。この演説のなかで棚橋は、事業内容としては教 育品の陳列が「最も重大な仕事で、博物館の生命と とも云ふべき問題」とし「臨時に小展覧会を開くと いふことは、教育博物館の仕事としては、最も適当 なことの一つと考えます」と述べた。58

そして教育品の陳列については展示すべきものを 5つに分類して紹介している。59 1つめは「内外国最 新の教授用具、生徒用品、材具建築の模型」で、こ れについては「独り教科書のみが教育家によりて研 究されて、それ以外の教授用具が等閑に附せらる、 といふことは誠に理由のないことである」、「教育博 物館としては、教具研究上の便利を与えることが目 下の一大急務であります。外国に於ける最新の教授 用具を買い入れて、内国教育家の比較研究に資する ことは此の点から最も必要なことである」とか「製 作場を附設して……模造して陳列しなければなりま せぬ……内国教育家の考案を集めて、進歩した用具 を製作して、世人に示すことを努めなければならぬ」 としている。2つめは「最新の内外国教科書類」で、 「外国の最も進歩した教科書類を買ひ集めて、比較研 究の便利を計る」ため、また「地方の学校長、教員 が……自分の学校又は学級のための最も適当な教科 書を選択することができる」ことから「内国で出版 された諸学校の教科書、現に行はれて居るあらゆる ものや、新に出版されたものを悉く集めて陳列して おく……どういふように普及して居るか、諸学校に 採用されてあるか、其の統計表を作つて、図書目録など共に陳列しておくことも望ましい」としている。3つめは「諸学校の規則、一覧、教授細目、学校建築や学校生活の模様を写した写真絵画の類」で、これは「内外国教育の状況を知らせるため」である。4つめは「内外国諸学校生徒の成績品」で、これによって「学芸進歩の度合、教授方法」がわかるとしている。5つめは、学校建築の絵画写真、各時代の学校生活の模様をあらわした絵画や写真、著名な教育家の肖像など「内外国教育史の資料となるべき教育家の肖像など「内外国教育史の資料となるべき教育品」である。これらの実現は、以前に『教育界』の臨時増刊号上で、棚橋が挙げていた改善案の実現にも通じることになる。

こうした教育品の陳列に加えて、棚橋は「博物館 に於ける今一つの事業は、教育図書の閲覧、並に、 教育に関する講演を催ほすこと」であると述べてい る。また、これ以外にもさらに5つの具体的な事業 内容を提案している。1つめは「来館者に対して、 館に陳列されてある教育品について、親切丁寧に説 明をして聞かせるといふこと」、2つめは「諸方の学 校などから教育品の購入方について、問ひ合せ来る 者がある。例へば、教育上の標本、機械を新に購入 せやうといふ場合には、その種類、品目、価、販売 店、購入の手続等に就いて、聞き合せ来るものがあ るとするばらば、一々之に応答してその便利を計る こと」である。3つめにあげられているのが教具の 研究で、4つめはこの「研究の結果や、新に館内に 陳列された教具などについて、雑誌上などで世間に 紹介することも……最も大切な事の一つ、従って、 教育博物館には一つの機関雑誌を有すること、毎年 年報を発行して其の一年間に於ける館の事業を世間 に報告する」ことである。そして最後に「地方の教 育展覧会等から要求のあった時は、備付の教育品の 一部を貸与すること」としている。60

棚橋は、先述のように教授用具の研究こそ、教育博物館の事業の柱と考えており、1907年から1909年にかけて、『教育研究』に5回にわたり「教具の研究」という論文を連載している。61 そして、翌年には教育博物館に事務所をおく教授用具研究会を発足させた。この会は「学用品教具及び校具を研究して之が改善を計る」ことを目的とし、その目的達成のために「イ、毎月一回全会員の会合を催し、教授用品に

関する諸問題を研究討議す。ロ、考案者の要求に応じて、教授用品の批評鑑定をなす。ハ、研究の結果を、時々教育雑誌に於て発表し、或は当事者をして製造販売をなさしむ」という事業を行なうとしている。教育博物館にて行われた創立協議会には、棚橋の他、東京にある各師範学校の訓導ら9名が出席した。62

それ以後の教育博物館は「各種陳列品及教科用図 書、教員参考書等 | を「購入又ハ寄贈ニ依り年々其 ノ数ヲ増加 | させ、63 「列品図書ノ貸付 | 64 も行なうよ うになり、貸出件数は1910 (明治43) 年12月までで 「三府二十二県に亘り、八十九箇所三万四千余点の多 きに達した。65また、以前は「古道具屋に往つたよ うな体裁 |66 とまで言われたが [この館の事業は時々 陳列品をとりかへ観覧者の眼を新にせんことをつと むるものなれは、時々の訪問を要す、一年前の観覧 は今日の全面にはあらざることを知るべし と、展 示品が毎年改められるようになった。教授用品研究 会も「一般教育品の審査をも要求するもの漸く多き を加へ来る現況とまた時代の要求は、教育品の改良 進歩を促すの急なる」により「増隆運の域に進み」、 「会の事業も拡張をはかり、発動的に教育品の研究も なすべく」に至り67、「漸く世の認むる處」68と なった。研究会は毎月一回開かれ、審査を希望する 場合は「審査料金一円を添えて申し込」み「審査討 議を加へ長短得失をたぐし、改造すべきはこれを促 して其注意を呼び」適当と認められたものには鑑定 書を交付した。69 また、1913 (大正 2) 年から研究結 果を発表する『現代教育』という雑誌の発行を行な い、講習会の開催もした。例えば、1916 (大正5) 年の夏には7日間にわたり、16の講演と文具や教科 書の工場見学が初等中等学校教員、校長、視学及び 教育関係の吏員に対して行なわれた。70

「棚橋源太郎氏がこれが主事たりし時には特に一時機を画して発達を見たる感あり」⁷¹といわれるように、特別室の開設、教育品研究会の発足などをとおして、教育博物館は発展していった。

4) 教育博物館における通俗教育館の開設

棚橋は1909 (明治42) 年10月からドイツを中心とした欧米への留学に出発し、1911 (明治44) 年12月に帰国した。この留学のことを次のようにふりか

えっている。

「教育教授研究といふ事で留学を命ぜられた。出発に当り文部省の福原次官が、教育教授の研究なんか誰でもやるのだから、君は特に博物館を視て来てくれといふ。その時私は心のうちに、怪しからん事をいふ人だ己は理科教育、手工、数学などと見て来ようと心に決めて居るのに博物館なんか見てどうする、と思つた。さて向ふへ行つて見ると、意外にも博物館施設の堂々たるには驚いた。そこで心機一転して、留学中の半分は博物館研究に費した」72。

この棚橋の留学中の1911 (明治44) 年 5 月17日「通俗教育調査委員会官制」が定められ、それを受けて文部省普通学務局は、東京と広島の高等師範学校に対して、「国民道徳ヲ涵養シ健全ナル思想常識ヲ養成スル」ために「道府県ニ於テハ地方ノ教育会ヲ活動セシムルハ勿論各学校ニ於テモ夫々適当ノ施設ヲナシ且教員ハ講師トシテ講演会等ニ出席」し、特に東京、広島の高等師範学校については「師範教育ノ中心トシテ地方ノ師範学校中学校等ニ対シ自然指導ノ位地」にあるので「学校教育ノ余暇ヲ以テ通俗教育上適当ノ事業ヲ施設シ斯種教育ニ付テモ之カ中心」となって尽力すべきであるという通牒を発した。73

そして教育博物館は1912 (大正元) 年、通俗教育館の公開をおこなう。その経緯は次のとおりである。

「大正元年八月、文部省は、通俗教育調査委員の決議に基き、東京高等師範学校長に対して、同校附属東京教育博物館内に、通俗教育に関する展覧及び講演等の施設を為さしむる様、申越されたるを以て、当館に於ては、爾来新館と称する一棟を以て之が陳列場に充て、建物及び陳列用具の修繕物品の蒐集に着手し、同年十一月三十日、大略の陳列を終りたるを以て、不取敢開館して公衆の観覧に供することとせり。当館に於ては、同時に又従来の教育図書閲覧所を以て、通俗教育調査委員会に交渉して、同会の認定に係かる通俗図書全部一通り借入れの承諾を得、一方又出版業者に対して通俗図書の寄贈を依頼し、此等蒐集の図書を従来の当館図書閲覧所に備へ付け、同年十月より公衆の閲覧に供することとせり」「74。

通俗教育館は、事業内容を「自然科学及び之が応 用に関する卑近なる器械標品模型絵画及び写真の類 を陳列して、公衆の観覧試用に供する事、及び通俗 の図書を備へて公衆の閲覧に供する事の二つに限りたり」としており、その名称を「通俗博物館」としないのは博物館だけでなく、通俗講演会、通俗図書館の三部から成り立っているからであった。⁷⁵ それでも「展覧事業は、通俗教育上極めて重大なる一要素」であり「当館に於ては、通俗教育上展覧の事業を以て刻下の急務と為し、之が経営を以て当館事業の主要なるもの」⁷⁶ とし、「展覧の主意は博物館や理科の実物教育と共に自らボタンをおしたりハンドルを廻して理科応用の実際的知識を普及」⁷⁷ させることにあった。

その展示は、天産、重要商品製造順序標品、理学 器械及び器械模型、天文地学、衛生の5つの部門か ら成りたっていた。天産については、淡水生物をガ ラスケースで飼育し、生きている状態で見ることが できるよう展示した。動物の剝製は、自然及び人工 の植物土石と共に展示したりして「四季に於ける動 植物生活の自然状態」を示していた。ジオラマ式の 生態展示である。78このほかには、動植礦物の標品な どもあり、それぞれには「之を図解せる絵画と併せ 陳列し両者相俟ちて其の理解を容易ならしめんこと に力め、其の海外の一部分は、自動式並に回転式の 実体鏡に仕掛けて観覧せしめつつ」あった。重要商 品製造順序標品については、様々な工業製品の「原 料より完成品に至るまでの標品を蒐集して、其の製 造場に於ける就業の実況を示したる写真絵画等と併 せ」展示した。理化学器械及び器械模型については、 標本とともに図解や、発達の歴史などを展示した。 天文地学については、地図や模型とそれを図解する 絵画や写真を展示し、幻燈も観覧できた。衛生につ いては、人体模型や食品、嗜好料の分析表などを図 解する絵画とともに展示した。79

棚橋は欧米留学中に、ドイツハノーバー市の郷土 博物館を見学し、「其の陳列の状況は先ず地方の森林 の樹木、下生植物、森林に棲む種々の動植物等が、 乾製や剝製の製品を用ゐて……生態を示すやうに面 白く陳列され……就中余の注意を惹いたのは、其地 方で盛んに産出する泥炭と、之に加工して種々の必 要品が製作されたる順序を示した標品の一組であっ た」とその展示の状況を紹介しており、通俗教育館 でのこのような展示は、これらにヒントを得たもの と考えられる。 様々な展示品に絵画や写真がそえられたり、生物の飼育やジオラマ式の生態展示といった、今までにない展示方法がとられているが、さらに注目すべきは、見学者が展示物に直接ふれて試すことが出来るということである。このことを棚橋は次のように紹介している。「理化学実験の器械及び普通なる器械の見本模型を陳列して、公衆をして随意に之を試用せしむることは、実に当館陳列場に於ける事業の主なるものとす。公衆に試用せしむべき器械は、堅固なる実験台下に固定し、其の傍に図解又は説明を附して、之が実験の方法、並に、其の原理、器械の用途等を明にせり」80と。

棚橋は、学校における理科教育の革新をはかると ともに、通俗教育館においては、それをより平易な 形で公衆の教育に役立たせる工夫をした。雑誌『帝 国教育』81には、通俗教育館での展示物に対する解説 文が2つ紹介されているが、それらはいずれも易し い文章で、すべての漢字にふりがなが付され「精し いことは裏の図書室で昆虫生態学を御覧なさい」と か「実験物理学第六九六頁と第七三六頁とを御覧な さい」と参考文献が紹介されている。図書室には、 通俗教育調査委員会認定の通俗図書と出版業者の寄 贈に係かる通俗図書、邦文雑誌230種、新聞14種、欧 文雑誌8種がそなえられており、児童室の設置も計 画されていた。講演会は、毎週定日に開くこととし、 幻燈利用や講演会とあわせての実験も予定されてい た。通俗教育館開館の10年前に10歳の児童が望んだ 展示方法が、ここで棚橋によって実現をみたのであ る。

5) 棚橋源太郎による博物館構想の拡張

教育博物館は1914 (大正3) 年6月東京高等師範学校の附属をはなれ、文部省普通学務局の所管となった。そして1921 (大正10) 年には「教育」の2文字をはずし「東京博物館」となり、科学博物館への歩みを進める。棚橋自身「大正三年、文部省普通学務局としての通俗教育の事業に主として力を入れる事になり……名称は教育博物館ではあるが、その実質は民衆教育を目的とする科学博物館であるのである」82と述べていた。棚橋が主事となって以来、教育博物館は特別室や通俗教育館を開設して発展していくが、東京博物館と名称をかえ様々な特別展をと

おしてさらに社会に開かれた機関となっていく。教育博物館が東京博物館となるまでの間に、棚橋が発表した雑誌論説を手がかりに、設立すべき博物館の種類とその在り方、教育機能に関わる博物館技術などについて、彼の博物館構想の拡張を次の3つの点からさぐりたい。

その1は、西洋博物館情報の紹介である。

先にも述べたように、棚橋は欧米の博物館を見て、 その発達ぶりにおどろいている。例えば「我が邦の 学問上教育上の施設で、欧米邦のそれに比べて後れ て居るものも鮮くないが、博物館の事業の如きは、 最も甚だしい一であろう。日本の考で欧米の諸国を 見て、誰しも先づ一驚を喫するものは、彼国に於け る博物館の施設の完備して居る事である。其規模が 大きくて建築の堂々たることや美しい装飾を施して ある事などを別としても、其の陳列品の多方面に亘 つて、実に豊富な事、そしてそれが科学的にまた教 育的にそれぞれ其の目的に従つて善く分類されて整 然たるには驚かざるを得ないのである。陳列館や陳 列箱の構造、陳列の方法、説明の附け方、保管の方 法などになると、流石に古くから経営されて居るだ けに博物館学 Museummskunde と言つて博物館経 営に関する専門の学問技術が発達して居る位であ る」83と、欧米の博物館を高く評価している。欧米に おいて博物館は「学芸研究の中心機関として、昔か ら最近に至る迄の研究発見や工夫製作の成果を系統 的に展開して学者専門家の参考に供すると同時に、 また、人民の博物館として、一般民衆の知識趣味の 普及向上に努めて居るのである」84、「素養ある専門 館員や学芸委員に、参考品の蒐集整理抔をさせて居 るばかりでなく、同時にまた教育に経験ある館員を 置いて、一般民衆の教育に当らして居る」85 と、棚橋 が博物館につて述べる際には、その在り方や教育機 能の発揮させ方など、すべてにおいて必ず海外の例 が示されている。

その2は、建設すべき博物館の性格についてである。

棚橋はそれまで、理科教育と博物館に関わってきており、建設すべき博物館についても、それらとの結びつきから必要性を感じたと思われる自然科学博物館、教育博物館、学校博物館をあげている。

自然科学博物館については「帝室博物館、遊就館、

大倉集古館抔は本邦既設博物館の允なるものである が、何れも大体歴史美術及美術工芸の博物館と見做 すべきものばかりで、自然科学博物館の方面は遺憾 ながら殆ど閉却されて居る有様である」86 とし「産業 と関係の深い科学博物館建設は、今後の経済戦に対 する準備として、何うしても看過ぎする事の出来な い問題の一つである」87とか「自然科学博物館の創設 といふ事は、我邦学界の現状から見ても、社会教育 民衆教育といふ点から早晩解決されなければならぬ 大問題である」88とその建設を強く説いている。そし て「熱心な研究者に依つて学校や標本室や各自の研 究室に、立派に蒐集され、整理され保存されて居る 無名の小博物館が到る処に見出され得る事と思ふの である」89、「帝国大学の地質学や人類学の標品室を あのま、解放しただけでも、博物館として非常な役 に立ち、少なからぬ利益を社会に与へる事は疑のな い事実である |90 と、まず身近な資料を組織し公開す ることをすすめている。

教育博物館については、ドイツのオーバーやバイ エルン国の教育会附属の教育博物館、ハノーバー市 の郷土博物館やアメリカのペンシルバニア州のフィ ラデルフィア博物館、セントルイス市の公立学校博 物館などを例にあげ、教具の改良や供給のための機 関として、その必要性を説いている。91 そして 「各種 教育博物館を各地に建設し、権威ある博物館委員の 制度を設け、或は其の地方有志教育家から成る教育 品学校設備の研究会の如きものを組織して、教育博 物館と共同して教育の研究、改善、普及の上に尽力 するやうにせられんことを希望して止まないのであ る」92と述べ、また「教育の種類、部門、教科などに 依って今少し分化してそれぞれ専門教育家の……団 体が出来たならば……其会の機関として永久の専門 的な博物館を……起すやうになりたい」93と、教育に 関わる学会をつくり、それらが博物館を持つことも すすめていた。

棚橋は、各学校に生徒が見学するための小型の教育博物館的なものを備える必要はなく、生徒は地域の専門博物館を訪問するべきであるとしている。*4 そして、学校博物館については、生徒が経営するための博物館として存在することを望んでいる。「学校博物館には生徒自ら手を下して作業させる事の出来る余

地が多いのである。他人の設備した公開博物館を観覧させるのとは聊か趣を異にし其の意味が一層深い様に思はれる所があるのである……生徒自らをして小博物館を経営させることは積極的の意味があり理科の教授上は勿論訓練の上にも少なからぬ利益がある。それに一つにはまた生徒をして他日世に出でから職業上必要な研究調査上自己の修養上に種々な博物館を利用する方法を学ばしめることの出来る利益もあるのである」95 と。

学校博物館の利用は、理科、地理、歴史等の教科の教授上有益であるとし、イギリスやアメリカの例を参考として、具体的な教授方法、展示方法などを紹介しているが、それは棚橋が留学前から価値を説いていた校外観察の実現に有効であることがわかる。その3は、博物館技術についてである。

棚橋は「展覧会の主意は面白く有益に見せるといふのである。来館者が愉快を感じ、多数見に来て呉れねば、展覧会の趣旨を没却するのである」96と述べ、展覧会事業は「教育の領分」97にあるとしている。特に当時流行の教育品展覧会における成績の展示方法について「是に依つて己れの学校に於ける教授の方法を世間に紹介するといつた様な考へは殆ど見られぬのである」98などの厳しい意見を述べ、具体的にどのように展示すればよいのかを欧米の学校博物館を参考にして紹介し「一見して吾々は其の写真なり、成績なりによつて、其の学校に於ける図画教授の方法なり、教育上の効果なり、成績なりを理解することが出来る」99ようにすべきであるとしている。

講演会、講習会については、海外では話だけでなく、小展覧会のようにものを展示したりスライドをみせたり実験をしたりして「必ず話以外に聴講者の目に訴へる部分が若干ある」と紹介し、一度に聴講する人数を少なく、かわりに回数を多くし、日を定めて規則正しく開催し、題材は実際の生活に有益な問題を選ぶべきであるとしている。100

そのほかには、団体の見学者に対して博物館案内をつけることや、博物館資料の貸し出し、巡回博物館などを提案し、また「我が国には博物館従業員の養成機関が無いのである。従つて博物館の真の任務を解し新らしい経営法を知つて居る専門家が無い」101となげいている。そして「博物館は見せ物小屋に非ずして、国民教育上の必要機関なれば、将来は政府も

公私国体も個人も、大に其の発達を図ると同時に、 其の教育的利用に留意せねばならぬ」¹⁰²と、説いて いる。

4. むすび

今日、博物館の基本的機能であるとされている収 集保存、研究、教育普及という3つの事項に対して、 手島が活躍した時代の教育博物館はいかなる機能を 果たしたであろうか。以下にその概要を記してみる と、第1の収集保存については、諸外国との交流に よる資料収集、公共機関からの資料の受け入れ、博 物学標本採集のための職員出張、などがなされ、第 2の研究については、収集された資料の比較、展示 方法の検討、などがなされ、教育普及については、 研究によって得た知識の教育器具製造業者への伝 搬、理化学器械などの紹介斡旋、資料の貸出と博覧 会への出品、目録の作成、教師に対しての学術講義 の開催、などがなされいる。手島の時代にすでに、 博物館活動の基礎がかためられていることがわか る。1877 (明治10) 年の教育博物館開館時にかかげ られた、教育上必要な内外の物品を収集し、その物 品を教育に従事する者に提供するという目的が果た されていく中に、これらの3機能が含み入れられて いたのである。この博物館の活動によって日本は諸 外国と、教育に関わる「物」や「情報」などの文化 交流を行い、それはこの時代の教育や教育産業に大 きく貢献した。

このような手島の教育博物館経営を、棚橋と比較してみると、「啓蒙的」であることがわかる。手島は自らが、教育博物館を案内したことがあったが、そのときの見学者は教育雑誌の編集者などであって、それは教育のためというより、出版物による民間人の啓蒙を意図したものであった。また、新しい博物館の構想についても、日本近代化、とりわけ工業化を念頭に置いた、上からの民衆啓蒙を第一に考えたものであった。ただし、手島は教育博物館に関わっていた間、これに関する論説を発表していない。そのため、どのような視点で教育博物館をとらえ、経営しようとしていたかをはっきりと述べることはむずつかしい。103

博物館の経営について本人によって書かれたもの がない手島に比して、棚橋は多くの雑誌論説をのこ している。それによると、棚橋はつねに「教育的」な視座から博物館をとらえていることがわかる。は じめて教育博物館と関わりをもったときから「教育 界にどのように役立てることができるか」を中心に 経営してきている。そして、海外からとりいれたも のは、ものだけにとどまらず、博物館における教育 機能をじゅうぶんに発揮するための方法にまでひろ がりをみせ、非常に具体的に人々に紹介している。 しかも、その「教育的」な視座は学校教育だけでな く、現代流の社会教育への広がりを持っていた事に 注目したい。

ここでは、生涯を通じて博物館と関わりをもった 棚橋の初期の博物館についての経営と研究をみてき た。この後の棚橋がこれをどのように展開させてい くかは、次なる課題としたい。

注

- 1 雄山閣出版、1988年。
- 2 福村出版、1986年。
- 3 手島工業資金団編刊『手島精一先生伝』1929 年、34頁。
- 4 上に同じ、37頁。
- 5 田辺尚雄「東京博物館と手島精一翁(一)「『明 治文化研究』 5巻2号、1929年2月、45頁。
- 6 1882年。
- 7 田辺尚雄「東京博物館と手島精一翁(二)「『明 治文化研究』5巻3号、1929年3月、26頁。
- 8 上に同じ、28-30頁。
- 9 『国立科学博物館百年史』1977年、74頁。
- 10 1903年。
- 11 正木直彦「教育博物館の組織に就いて」、注 (10) に同じ、附録7頁。
- 12 寺田勇吉「教育博物館」、注(10)に同じ、附録25頁。
- 13 金川某「東京博物館概説」、注 (10) に同じ、 3-4頁。
- 14 『文部省第十年報』1882年、912丁。
- 15 『文部省第十一年報』1883年、935丁。
- 16 上に同じ。
- 17 『文部省第十二年報』 1884年、606丁。
- 18 石附実は『教育博物館と明治の子ども』注(2) に同じ、において、教育博物館を「文部省が、

- 新しい教育制度の発足にあたり、教育の道具立ての展示の場として開設した」とし「近代教育のショールーム」と称した。
- 19 「東京教育博物館の過去現在」『教育時論』378号、1895年10月15日、32頁。
- 20 『文部省第十二年報』1884年、605丁。
- 21 注 (10) に同じ、7頁。
- 22 『米国百年期博覧会教育報告』巻三、文部省、 1877年、26丁。
- 23 田中不二麿「教育瑣談」『開国五十年史』1907 年、733-734頁。
- 24 『文部省第四年報』1876年、376丁。
- 25 『文部省第七年報』1879年393丁、『文部省第八年報』1880年501-502丁、『文部省第十二年報』605-606丁、『文部省第十三年報』1885年405丁。
- 26 Monroe, P., *A Cyclopedia of Education*, IV, The Macmillan Company, 1913, p. 333.
- 27 『国立科学博物館百年史』1977年、139頁。
- 28 田辺尚雄「東京博物館と手島精一翁 (二)」『明 治文化研究』 5 巻 3 号、1929年 3 月、30頁。
- 29 上に同じ、31頁。
- 30 上に同じ。
- 31 上に同じ。
- 32 田辺尚雄「東京博物館と手島精一翁(完)」『明 治文化研究』 5巻4号、1929年4月、66-67 頁に所収。
- 33 上に同じ、67-69頁に所収。
- 34 棚橋源太郎、宮本馨太郎『棚橋先生の生涯と 博物館』六人社、1962年。
- 35 雑誌『教育時論』324号1894年4月から418号 1896年11月にわたり、27回掲載された。
- 36 注 (34) に同じ。
- 37 棚橋源太郎 「校外観察に関する研究」 『教育研究』 13号、1905年 4 月、15頁。
- 38 上に同じ、16頁。
- 39 棚橋源太郎、本田増次郎共訳、山海堂、1902 年。
- 40 『文部省第二三年報』1895年、34丁。
- 41 『文部省第二六年報』1898年、53丁。
- 42 『文部省第二七年報』1899年、50丁。
- 43 河野キヨ子「裁縫及び手芸に関する陳列品」

- 注(10)に同じ、86頁。
- 44 久留正道「校舎建築図及模型に就いて」注(10) に同じ、151頁。
- 45 注 (12) に同じ。
- 46 注 (11) に同じ。
- 47 嘉納治五郎「東京教育博物館の組織に就て」 注(10)に同じ、附録27-29頁。
- 48 佐々木吉三郎「東洋唯一の教育博物館」注(10) に同じ、附録52頁。
- 49 『少年世界』定期増刊号『博物館』1902年、119-124頁。
- 50 助三郎「教育博物館を観るの記」『少年世界』 10号、1895年、74-78頁。
- 51 注 (10) に同じ、110-116頁。
- 52 注 (10) に同じ、117-130頁。
- 53 注 (52) に同じ。
- 54 上に同じ。
- 55 上に同じ。
- 56 上に同じ。
- 57 上に同じ。
- 58 棚橋源太郎「教育博物館」『教育研究』28号、 1906年7月、30頁。
- 59 上に同じ。
- 60 棚橋源太郎「欧米の教育界と機関雑誌」『教育研究』100号、1912年7月、148頁。
- 61 42号1907年9月、52号1908年7月、53号1908 年8月、54号1908年9月、62号1909年5月に 掲載されている。
- 62 「教授用品研究会」『教育研究』63号、1909年 6月1日、107頁。
- 63 『日本帝国文部省第三六年報』1908-1909年、 123丁。
- 64 『日本帝国文部省第三七年報』1909-1910年、 123丁。
- 65 千 幹「東京教育博物館教育品貸出の状況」 『教育研究』81号、1910年12月、100頁。
- 66 注 (12) に同じ。
- 67 注 (65) に同じ、101頁。
- 68 「東京教育品研究会の近況」『教育研究』85号、 1911年 4 月、101頁。
- 69 上に同じ。
- 70 「教育品研究会の講習会」『教育研究』152号、

- 1916年6月、101頁。
- 71 注 (65) に同じ。
- 72 棚橋源太郎「何の因縁、動機で私の境遇は作られたか」『教育週報』652号、1937年11月。
- 73 『明治以降教育制度発達史』第6巻、1939年、 212頁。
- 74 棚橋源太郎「通俗教育博物館施設の現況及将 来の計画」『帝国教育』371号、1913年6月、 55頁。
- 75 上に同じ。
- 76 上に同じ。
- 77 「新設通俗教育館を観る」『帝国教育』365号、 1912年12月。
- 78 注(1)に同じ、148頁。
- 79 注 (84) に同じ。
- 80 注 (85) に同じ、57頁。
- 81 注 (83) に同じ。
- 82 棚橋源太郎「教具中央機関」『現代教育』76号、 1919年11月、69頁。
- 83 棚橋源太郎「先づ自然科学博物館を建設すべし」『現代教育』8号、1914年4月、6-7頁。
- 84 棚橋源太郎「科学博物館建設の急務 (一)」『東 京朝日新聞』1919年10月3日。
- 85 棚橋源太郎「科学博物館建設の急務 (二)」『東京朝日新聞』1919年10月4日。
- 86 注 (74) に同じ。
- 87 注 (75) に同じ。
- 88 注 (79) に同じ。
- 89 上に同じ、8頁。
- 90 上に同じ。
- 91 棚橋源太郎「欧米の教育と教育品の研究」『現 代教育』 1号、1913年10月、21-26頁や「教 具のセンター」『現代教育』33号、1916年5月、 54-58頁などにそのような記述がある。
- 92 注 (82) に同じ、71頁。
- 93 棚橋源太郎「欧米の教育界と機関雑誌」『教育 研究』100号、1912年7月、147頁。
- 94 棚橋源太郎 「学校図書館と学校博物館」 『教育 時論』 1190号、1918年 5 月。
- 95 棚橋源太郎「理科教授と博物館」『現代教育』 69号、1919年4月、128-129頁。
- 96 棚橋源太郎 [展覧会経営に対する私見] [教育

- 界』16巻1号、1916年11月、56-57頁。
- 97 棚橋源太郎 「展覧会の施設に就いて」 『現代教育』 3号、1913年12月12頁。
- 98 注 (92) に同じ。
- 99 上に同じ。
- 100 棚橋源太郎『社会教育施設としての講演及講習会』『帝国教育』420号、1917年7月、17-21頁。
- 101 棚橋源太郎「本邦社会教育の不振」『教育時論』 1214号、1919年1月。
- 102 棚橋源太郎「国民教育と博物館」『教育時論』1121号、1916年6月、5頁。
- 103 産業啓蒙家としての手島については、三好信 浩『近代産業啓蒙家の研究』風間書房、1995 年を参看。